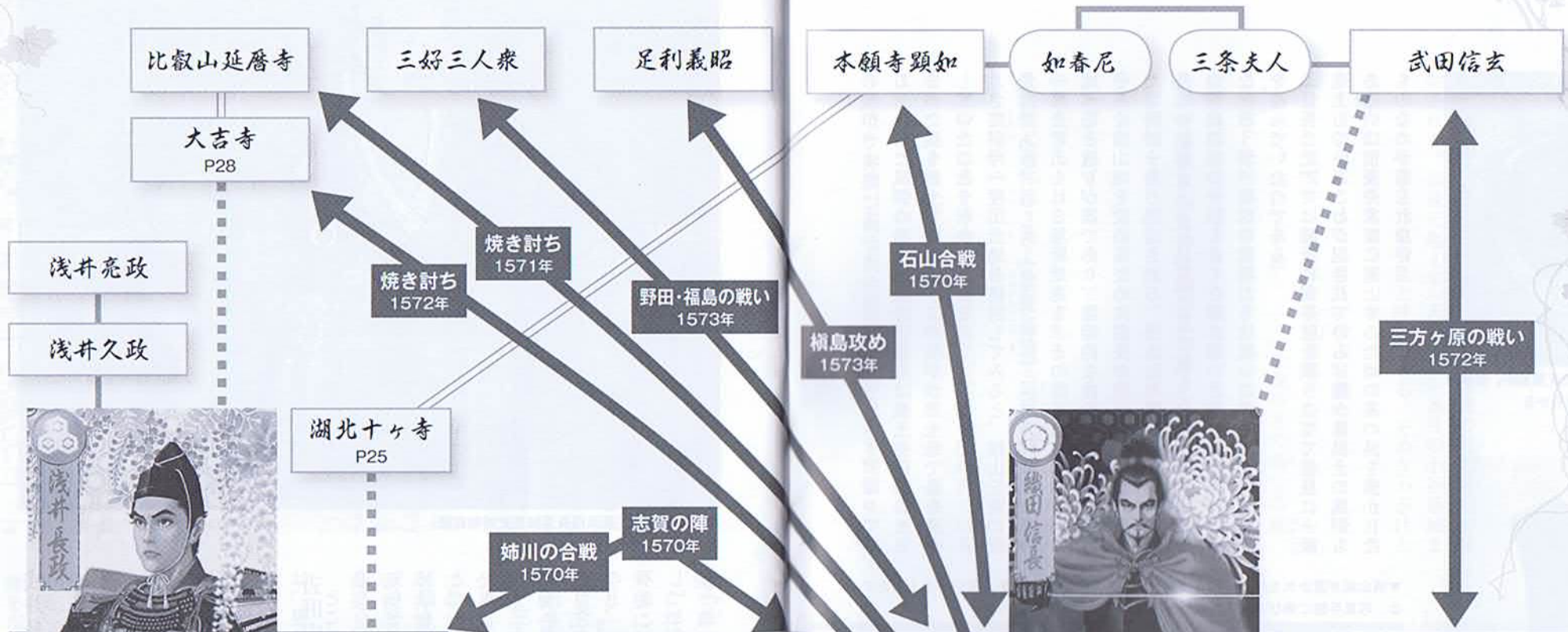


元龜争乱

長政VS信長相関図

ここに使用している画像は、浅井三姉妹キャンペーン・イベント実行委員会作成の「戦国英雄カード」のもので、このカードを抽選でプレゼントします。詳しくは39頁をごらんください。



朝倉義景



浅井長政



お市



織田信長



徳川家康

- 真柄直隆
- 朝倉景鏡
- 朝倉景健

P 43

- 阿閉貞征・貞大
- 浅見討馬守
- 磯野貞昌

山本山城主。のち、信長につく…………… P 32
 小谷城北側の焼尾砦を守るも、信長に内通

- 大野木茂俊
- 三田村左衛門尉
- 遠藤直経
- 赤尾清綱

横山城主。
 横山城主。
 須川城主。姉川の合戦で討死…………… P 43
 小谷城山上に構えた屋敷で、長政が自刃

- 万福丸
- 茶々
- 初
- 江



関ヶ原で磔
 のち徳川秀忠夫人
 のち京極高次夫人
 のち秀吉側室・淀殿

- 柴田勝家
- 丹羽長秀
- 佐久間信盛
- 明智光秀
- 木下秀吉
- 竹中重治
- 森可成

坂本城主
 志賀の陣で討死
 姉川合戦後、横山城城番…………… P 21

- 石川数正
- 本田忠勝
- 榊原康政
- 酒井忠次

凡例

- 戦国武将
- 姫
- 攻撃
- 対立
- 血縁
- 同盟
- 末寺
- 掲載頁

試してみよう
 七本鎗のよれ味
 五臓六腑に
 しみわたるより

清酒

七本鎗

シチホンヤリ

滋賀県伊香郡木之本1107
 富田酒造有限公司
 TEL・0749(82)2013
 FAX・0749(82)5507

(構成) 遠野四郎



▲信長が馬をつないだといわれる甲津畑のクロマツ



▲右手の岩ヶ谷林道からは歩きに



▲林道を下りるとかくれ岩がある

京都へ向かったというが、伊勢神宮から関宿を経て東海道を西へ向かうのが最短コース。東海道を取らなかったのは、伊賀や甲賀に潜伏している六角方の脅威があったからだろうか。ともかく、初冬の大雪に見舞われた千草街道を通っている。

甲津畑に残る信長馬つなぎの松

八日市の東に甲津畑という山里の集落がある。千草越えの近江側の起点ともいえる、街道最奥の村だ。この村の速水家に「信長馬つなぎの松」と呼ばれるクロマツがある。幹回り2・5mほどの見事な松で、千草街道を通った信長が、速水家で休息するため馬をつないだ樹だといわれている。当家の速水菅六左衛門は六角氏の家臣だったが、信長の南近

江進攻を機に信長方につき、千草越えに際しても杉峠から八日市までの道を先導して警護役を務めていた。信長が、京から岐阜へ戻る道として千草越えを選んだのは、菅六左衛門の手引きが大きかった。速水家のクロマツがそれを物語っている。

ところが、この街道で信長は危機一髪の際に遭遇する。山中で鉄砲の待ち伏せに遭ったのだ。杉谷善住坊という男が大きな岩に身を潜め、信長を狙撃したのだ。善住坊とは何者なのか、善住坊ほどの辺りの大岩から狙ったのか、距離はどれくらいあったのか。興味は尽きない。

そこで、東近江市の旧永源寺町に住む西村和恭さん(48歳)に、事件現場へ案内してもらうことになった。西村さんは平成6年から「殿、早く！」前には菅六左衛門が叫んだ。信長は身を屈め、手綱を引く。続いて3発目と4発目が発射された。が、すぐに信長の姿は見えなくなった。善住坊は、放心したように河原に座り込んだ。一瞬の静寂があった。「捕らえよ！ あやつらを逃すな！」怒声が対岸から聞こえた。その声で善住坊は我に返った。そして部下とともに一目散に大岩の背後をよじ登り、山中に消えていった。

捕まった善住坊は鋸挽きの刑に

「言継卿記」によると撃った弾は4発、「信長公記」では2発と記されています。いずれにしても、弾が少しずれたら信長は命を落としていました。西村さんは、対岸の古道を見上げながらつぶやいた。間一髪だったのだ。

ただ、少し疑問が残る。鉄砲を4丁持っていたというが、果たして一人で続けて撃てるだろうか。国友鉄砲研究会の広瀬一實さんに

10年間、町史編さんの仕事に携わっていたので、町の歴史に詳しい。町の地域づくり協議会でも広報を担当し、隔月の地域情報誌をつくっている。地域づくり協議会では、毎年4月に「わがまち探訪フィールドワーク」千草街道を往く」というウォーキングイベントを開催している。甲津畑から千草までの15kmを7時間ほどかけて歩く催しで、定員の倍近い応募があるという人気イベントだ。

弾が信長の体をかすめ袖を貫く

甲津畑の集落から林道を車で上がった。鳴野という所で道は二俣に分かれ、右手の細い岩ヶ谷林道を取る。ここからは歩きだ。高度を上げるにつれて、左手の藤切谷が徐々に深くなっていく。二俣から歩くこと約20分、「善住坊かくれ岩」と記された看板が見えてくる。林道から左手の坂を河原に下りていくと、50mほど先に大きな岩が現れる。「これですよ、かくれ岩は」

西村さんは、そう言いながら大きな岩の先へ歩いていく。目の前にゆるやかな流れの河原が広がっている。「対岸の少し上をよーく見てください。木々の間を、横にスーッと筋が付いているでしょ。あれが昔の峠道です」「うしろの岩からの距離は？」

「50mはあるでしょうね」記録には12・3間(約22m)とある。そうか、撃つときに河原まで出てきたんだ。対岸を尋ねると、「一人でもできんことはないが、相手は馬に乗った人やからね。後ろに火を点けて鉄砲を手渡す助っ人がいたんやろな」とのこと。一説では、善住坊は甲賀武士の出身で、娘が六角承禎の側室だったという。だとすれば、かなり組織的に計画された犯行だったに違いない。単独犯ではなかったのだろう。

実は、この話には後日譚がある。杉谷善住坊は、その後ある人物を頼って高島郡に隠れ住んでいたが、天正元年(1573)9月の浅井氏滅亡直後に、高島郡を支配していた磯野員昌によって捕らえられ、9月10日に岐阜へ送られている。そして、立ったままの姿で土に埋められ、通行人に首をノコギリで挽かれて数日後に息絶えたという。

さて、危機を脱した信長は、5月19日に千草街道を抜けて21日に岐阜へ戻る事ができた。朝倉氏を撃つため京都を出陣してからは1ヶ月。岐阜で体勢を整えた信長は、その1ヶ月後、いよいよ近江侵攻にとりかかる。

※「言継卿記」では、信長を狙った弾は4発で、信長にかざしていた笠に当たったと記され、「信長公記」では、弾は2発で、信長の体をかすったと記されている。

おもな参考文献
「水源寺町史 通史編」
「近江の峠道」(木村至宏・著/サンライズ出版)
「織田信長合戦全録」(谷口克広・著/中公新書)



▲かくれ岩の前に立つ西村和恭さん



▲千草越えの古道は対岸にある